JICA ボランティア活動報告　３　　２０１７年　３月

北橋　雅子

１月が夏休みの南半球モザンビークでは、２月から新しい年度が始まりました。私が去年教えた１年生は２年生になりました。今年はその２年生と、新１年生に教えます。先日、２年生にテストをして、割り算ができない、ということが判明しました。それで他の隊員達にいろいろ聞いてみたところ、小学校では九九の表を教えているそうですが、ちゃんと覚えさせてないみたいです。日本では九九を口で唱えながらリズミカルに覚えますが、他の国では、単なる数字の表として覚える場合が多いようです。だから、欧米でも覚えきれない人たちがけっこういるらしいです。九九を覚えてなければ、当然割り算はできません。

九九を覚えてないから割り算ができない、という状況は、不思議でも何でもありません。ところがここで、思いがけない情報が入りました。現地語のシャンガナでは数の概念が５進法だいうのです。６，７，８，９がなくて、６は５と１、という言い方になるそうです。１０という言葉はあります。２０は１０の２倍、という言い方になるそうです。１０が５の２倍、２０が５の４倍、という言い方になるなら５進法ですが、１０という言葉があって、６，７，８，９がないのは、５進法と１０進法がミックスしています。そして、どうやら、０の概念はなさそうです。これだと、掛け算割り算以前に、足し算引き算が大変そうです。

街で買い物をすると、おつりの計算が信じられない間違え方で間違ってることが頻繁にあります。どうしたら、そういう間違いができるんだ、というほど信じられない間違いです。たとえば、１の位が５の数どうしの足し算引き算は、必ず１の位が０になります。これは私たちにとってもっとも簡単な種類の計算です。それなのに、５に５を足したり引いたりして、また１の位が５になる、という間違いが多いのです。これは、５進法と１０進法がごっちゃになっていて、桁が上がって一の位が０になる、という概念がないからでしょう。

シャンガナには文字がないので、彼らが数の表現をするとき、アラビア数字が彼らの頭の中に浮かんでいるとは、考えない方がいいでしょう。５進法は、たぶん、手の指が５本だからでしょう。だとすると彼らが５という時、手の指５本が頭に浮かんでるのかもしれません。数字が存在しない音だけの不思議な数の概念です。ここに、アラビア数字の１０進法、そして０の概念を導入するには、それが、全く別の概念であることをはっきりさせる必要があります。それをはっきりさせずに、シャンガナの数と対応させて１０進法の数を教えてしまうと、混乱するな、という方が無理でしょう。

小学校で、シャンガナの数と対応させて、ポルトガル語の数を教えているかどうかわかりませんが、単にポルトガル語で数える練習をしているだけだと、普段シャンガナで数えている子供たちはきっと混乱するでしょう。１から数えていると、０の概念がないままです。アラビア数字の１０や２０を見ながら、１の位の０を認識しないと、音だけでは１０進法の概念がわからないでしょう。小学校でこれを認識して教える先生がいるでしょうか。九九の暗記どころの問題ではない気がしてきました。シャンガナだけでなく、モザンビークの他の現地語も５進法だと聞きまし

た。だとすると、これは国の算数教育上の大問題です。

ここで大問題だと騒いでも、初等中等教育の現場には、他にもいっぱい大問題があるのです。子供の数に対して学校の数がたりないこの国では、一クラス１００人もいます。そして、学校は朝昼夜の３交代制です。授業内容がどうのこうのと言う前に、学べる環境が整っていません。先生も足りないし、教科書も足りません。

小学校にポルトガル語の授業を見学に行きました。午後の最初の授業でした。午前の部が終わって生徒が帰ってしまうと、一旦校門が閉じられます。私が着いたとき、授業開始の１０分くらい前だったでしょうか、まだ校門が閉まっていて、生徒たちがいっぱい待っていました。しばらく待って、彼らといっしょに校庭に入りました。

５年生のポルトガル語は、その日、４０分一コマが二コマ続いていました。小学校ですから、担任の先生がすべての科目を教えます。授業開始前に、カンティーンで一息ついていた先生に挨拶すると、今日はテストだと言います。テストを見学してもつまらないだろうと思ったのでしょう。でも私は見学させてもらうことにしました。

テスト開始前に、子供たちの写真を撮りました。彼らは元気いっぱいです。１００人もいるので、教室はすし詰め状態です。テストだからと言って間隔をあけるということは不可能です。

先生がテスト用紙を配って、テストが始まりました。子供たちはそれぞれペンを持ってテストに取り組みますが、写真のようにくっついて座っているので、書く作業に集中するのも一苦労な感じです。隣の答案が否応なく見えるし、私語も少なからずあります。必ずしもテストの答えについてではないかもしれませんが、テストに集中していない、もしくは集中できないことは確かです。机に座っていると集中できないので、前のあいたスペースの床に座ってひざの上で回答してる子もいました。この環境でテストするのは無理があるなあ、と思わざるを得ません。

学校教育の現場には、このような無理が無数にあるのです。ここではそれをいちいち書きませんが、本当にたくさんの無理があるのです。体制が整っていない学校というシステムに、多すぎる子供たちが詰め込まれているのです。それでも、子供たちの顔を見ていると彼らの学びたいエネルギーが、私の教えたい気持ちを刺激します。無数の無理を通しているおかげで、平日の学校には余裕がありません。最初の報告で書いたように、私は学校で絵本の読み聞かせをしたいと思っていて、その可能性を探るために、学校見学をさせてもらってるのですが、学校でやるとしたら、土曜日しかなさそうです。

学校はいつもぎゅうぎゅうですが、子供たちは学校に行く前、帰ってから、と時間があります。その時間、彼らはその辺で遊んでるようです。そういう子供たちにアプローチできる場所があればいいのですが。

さて、ＪＩＣＡを通してお願いしていた絵本の寄付、２月に２０冊が届きました。さっそく、その中の「ししときつね」というお話を翻訳してみました。シャンガナは５進法だと教えてくれた隊員にシャンガナ訳をお願いしたら、彼と現地の友達が二人で訳してくれました。これを中学校で読み聞かせしてみることにしました。このお話では、日本の獅子舞の獅子頭を、キツネがインドから運んできた、ということになっているので、読み終わってから獅子舞のビデオを見せました。獅子に頭をくわえてもらうと縁起がいい、という説明をして、お祭りで人々が獅子の口に頭を突っ込んでいるところのビデオも見せました。絵本のお話は中学生には子供っぽすぎたかもしれませんが、獅子舞のビデオには、すごく興味を持ったみたいでした。

シャンガナに訳してくれたボランティアと二人で「ししときつね」の読み聞かせをしているところ

読み終わって獅子舞のビデオを見せているところ